

演題 1 : 稲作農業の未来への使命 —財政社会学からのアプローチ—

講師 東京大学名誉教授
神野 直彦 氏

【講師プロフィール】

昭和 21 年（1946 年）埼玉県生まれ。大阪市立大学経済学部助教授、東京大学大学院経済学研究科・経済学教授、関西学院大学人間福祉学部教授、地方財政審議会会長、日本社会事業大学学長などを経て、現在は東京大学名誉教授、税制調査会会長代理を務める。平成 21 年（2009 年）紫綬褒章を受章。著書は『経済学は悲しみを分かち合うために-私の原点-』2018 年 岩波書店等多数。

稲作農業の未来への使命

—財政社会学からのアプローチ—

東京大学名誉教授
神野直彦
2022年3月3日

第二次大戦後、スウェーデンは豊かな国となり、人々が「繁栄」と呼ぶ状況を生み出した。私たちは、あまりに簡単に幸福になりすぎた。

人々は、それは公正であるか否かを議論した。

私たちは戦争を回避し、工場を建設し、そこへ農民の子どもが働きに行った。

農業社会は解体され、私たちの国は新しい国になったが、人々が本当にわが家にいるといった感覚をもてたかどうかは確かではない。

1950年から60年に至る10年間に、毎日300戸の小農家が閉業するというスピードで、農業国スウェーデンが終焉した。

人々は大きな単位、大きなコミュニン(市町村)を信じ、都市には遠い将来にわたって労働が存在すると信じた。

私たちは当然のことながら物質的には豊かになったが、簡単な言葉でいえば、平安というべきものを使い果たした。

私たちは新しい国で、お互いに他人同士になった。

小農民が消滅するとともに、小職人や小商店が、そして、病気のおばあさんが横になっていたあの小さな部屋、あの小さな学校、あの子豚たち、あの小さなダンスホールなども姿を消した。

そういう小さな世界はもう残っていない。小さいものは何であれ、儲けが少ないというのが理由だった。

なぜなら、幸福への呪文は<儲かる社会>だったからだ。

スティッグ・クレッソン(Stig Claesson)

1. 私たちは「根源的危機の時代」に生きている 一人類史的課題としての「地域再生」

- (1)ギリシャ神話アンティゴネの舞台である古代都市テーベが未知の病いに脅えた時、その原因は誰もがわかっていた。それはコミュニティの崩壊である。
- (2)人間の歴史が混迷し、「根源的危機」に陥っている時、その原因は誰もがわかっている。人間と自然との関係である自然環境と、人間と人間との関係である社会環境という人間の生命を抱く二つの環境が破壊されてしまったからである。
- (3)「地域再生」とは人間と自然とのエコロジカルな関係を基礎に形成される人間と人間との関係としての生活の「場」である地域社会を再創造することである。
- (4)二つの環境破壊という根源的危機を克服するには、こうした「地域再生」を下から上へ(von unten nach oben)と積み上げていくしかないのである。
- (5)そうだとすれば、日本の「地域再生」では稲作農業が決定的な役割を果たすことは容易に理解できるはずである。

3

2. 故郷存続運動—故郷は近くにありて愛するもの

すべての地域には独自の資源があり、それはいつの時代においても、そこに住む人間たちに生存の基礎を提供し、彼らの活動と発展の枠組みを与えてきた。人間は、自らの地域に根をもち生活をもってきた。その地域と自然とのかかわりは、人間の社会的、文化的生活に浸透しており、人々の感じ方、考え方、ものの取り扱い方に影響を与えた。地域とのかかわりは、人々の安寧および営みにとって基本的な意味をもってきた。いま、人々が近視眼的な利益を求めて、生まれ出たその環境を捨てて異郷へ移り住み、この地域が抜け殻のようになったとき、どんな結果が訪れるだろう。故郷を残そう、さもなくば無人となってしまう、という危機感が強い反響を呼び起こし、故郷存続へのたたかいを生みだしている。

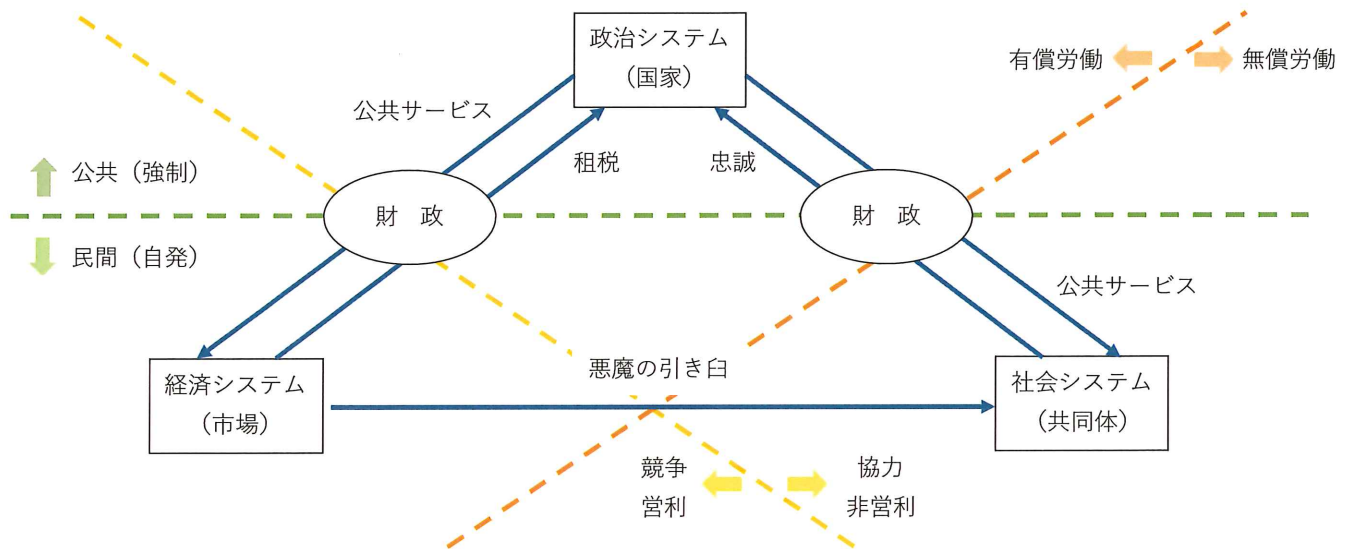
地域開発が問題とされるとき、開発業者がもっともよく使う議論は「雇用の創出」である。しかし多くの場合、雇用機会は一時的であり、就労者の数も失われるものの価値とは釣り合わない。

質の高い人間的な環境をつくりだすには、その出発点として、全体的把握と自然環境に関する長期的な計画が要求される。あらゆる人間的な安寧は、何よりも活力のある自然環境に基礎を置くものである。それゆえ、私たちは、私たちの自然を守るという重要な課題をないがしろにし続けるならば、いずれはなんらかの罰を被ることになるだろう。

(『視点をかえて—自然・人間・全体』1998、新評論社より抜粋)

4

3. 市場社会では三位一体が三角形となる。



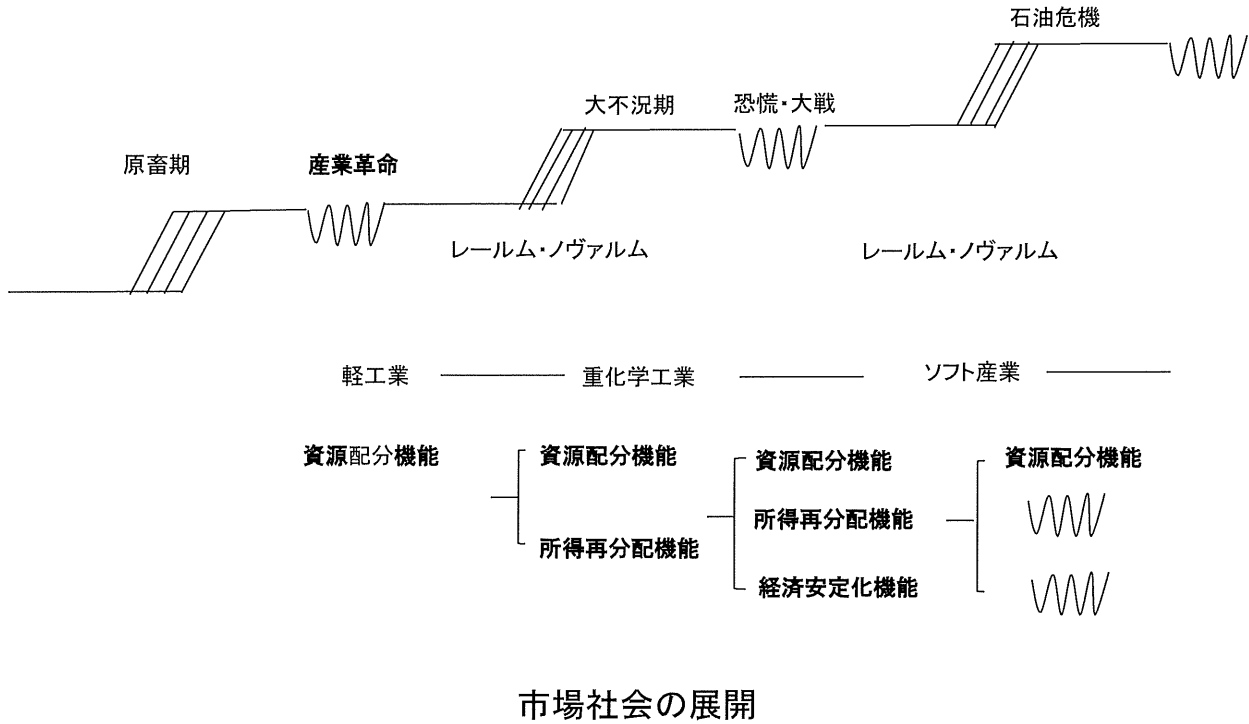
5

4. 導き星としての二つのレールム・ノヴァルム —宇沢弘文先生の教え—

- (1) 宇沢弘文 東京大学名誉教授が考えた
ヨハネ・パウロ2世の「レールム・ノヴァルム」の副題(1991年)
「社会主義の弊害と資本主義の幻想
(Abuses of Socialism and Illusions of Capitalism)」
- (2) 1891年のレオ13世のレールム・ノヴァルム
「資本主義の弊害と社会主義の幻想
(Abuses of Capitalism and Illusions of Socialism)」
- (3) 資本主義と社会主義を越えて人間の尊厳と魂の自立を可能にする経済体制は、いかなる特質をもち、いかなる方法で具現化できるか。
- (4) 二つの環境破壊
自然環境の破壊
人的環境の破壊
- (5) 自己再生力のある自然環境、自己再生力のある人間環境(人間の社会)という二つの自己再生力を持続可能にする発展の追求。

6

5. 「正しく問題を整理すれば、そこには答えの半分が含まれている」—構想する課題の整理



7

6. 「危機の時代」の開幕

—重化学工業を基盤としての福祉国家の行き詰まり—

(1)福祉国家の終焉を告げる1973年

(2)経済システムの転換—石油ショック

自然資源を多消費する大量生産・大量消費の重化学工業化の終焉。

(3)所得再分配機能と経済安定化機能の前提条件の崩壊

—ブレトンウッズ体制の最終的崩壊

資本統制を前提にした固定為替相場制から、資本が国境を越えて自由に動き回る変動相場制へ。

8

(4)政治システムの転換

- 民主主義の自己否定としての9. 11
- 2007年10月11日の宇沢先生からの私信

『世界』のご論攷「経済を民主主義の制御のもとへ」、感動を込めて拝読させていただきました。

1973年9月11日、私はシカゴにいました。たしか、Al Harburgerの家でかつての同僚たちとの集まりに出ていたとき、たまたま、チリのアジェンデ大統領が殺されたという知らせが入った。その席にいた何人かのFriedmanの仲間が、歓声をあげて喜び合った。私は、そのときの、かれらの悪戯のような顔を見ることはできない。それは、市場原理主義が世界に輸出され、現在の世界的危機を生み出すことになった決定的な瞬間だった。私自身にとって、シカゴと決定的な決別の瞬間だった。ご論攷の冒頭に、アジェンデ虐殺のことに触れられていることに、何ともいいようのない感動を覚えます。

「トリクルダウン効果」ではなくて「ファウンテン効果」もすばらしいアイデアですね。「ファウンテン効果」が現実のものとなるような制度こそ、私たち経済学者が求めているのではないのでしょうか。社会的共通資本の考え方を模索していた頃の、私の気持ちをじつにびったり表現しているようにも思われます。

(以下略)

9

7. 「市場の失敗」のグローバル化

(1)参加なき所得再分配国家の行き詰まり

国民国家ごとに「市場の失敗」に対応することを前提にした、自由多角的な貿易体制の終わり。

(2)「小さな政府—大きな市場 (less state-more market)」戦略によるグローバル化

アングロアメリカンモデルによるセーフティネットを取り外すことでの活性化。

(3)オルタナティブとしての「ヨーロッパ社会経済モデル」

社会的セーフティネットと社会的インフラストラクチャのネットを張り替える。
→グreshamの法則が機能するか。

(4)「市場の失敗」のグローバル化としての二つの環境破壊

—表出現象としてのパンデミック。

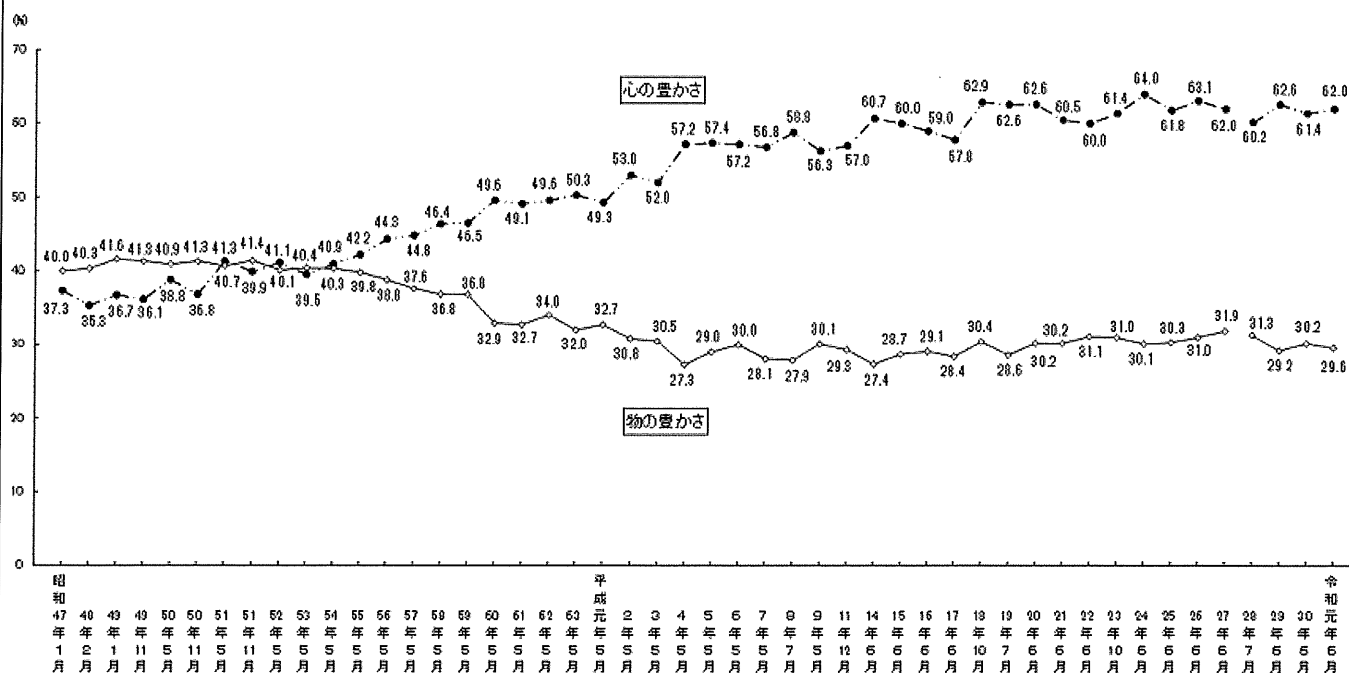
10

8. 社会目標を「所有(having)欲求」から 「存在(being)欲求」へ転換する —「豊かさ」から「幸福へ」—

- (1)生活水準の上昇から生活様式の充実を求める—「豊かさ」から「幸福」へ
「飢餓の恐怖」からの解放
- (2)存在欲求＝人と人、人と自然との関係で充足される欲求
＝幸福の実感
所有欲求＝自然を所有することによって充足される欲求
＝豊かさの実感
- (3)工業社会は存在欲求を犠牲にして、所有欲求を充足したのに対して、ポスト工業社会としての知識社会では人間の人的欲求である存在欲求の充足を目指す。
- (4)所有欲求を充足する工業社会では「蓄える」ことが美德であっても、知識を生産するポスト工業社会では「惜しみなく与え合う」という共同体的人間関係が培養する精神的風土が美德となる。

11

「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へ



(注1) 心の豊かさ → 「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさをやみくもりにある生活をするに重きをおきたい」
物の豊かさ → 「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」

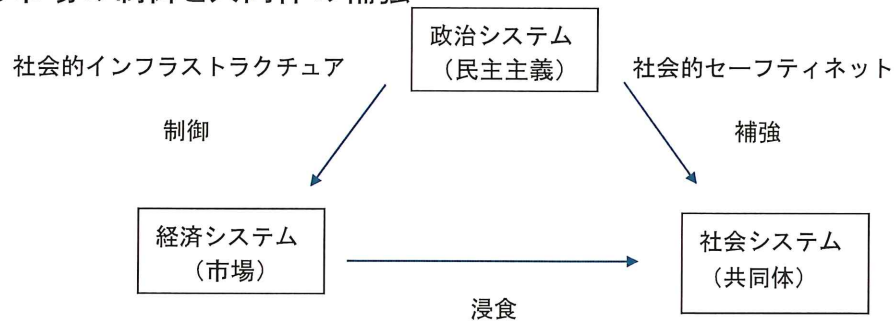
(注2) 平成27年6月調査までは、20歳以上の者を対象として実施。平成28年7月調査から19歳以上の者を対象として実施。

出所：内閣府国民生活に関する世論調査 <https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-life/2-2.html>

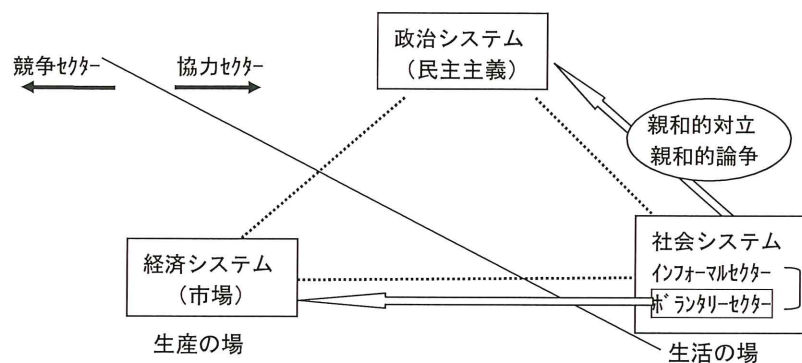
12

9. 「政府縮小—市場拡大(less state—more market)」戦略から 「市場抑制—社会拡大(less market—more society)」戦略へ

(1)民主主義による市場の制御と共同体の補強



(2)欲望の「奪い合い」から幸福の「分かち合い」



13

10. 「地域」を「発展」させる

(1)「発展する (develop)」とは開くことであり、「閉じる (envelop)」の反対語である。

内在しているものを開くことが「発展」であり、外部からの圧力で変形することは「発展」とはいわない。

(2) 未来は誰にもわからない。すべての人には掛け替えもない能力がある。

(3) 未来への「発展」はすべての人が掛け替えのない能力を発揮し、すべての地域社会が掛け替えのない「地域力」を発揮することで可能となる。

(4)「地域力」とは地域社会の構成員の個々の能力と、構成員相互の凝集力(=社会関係資本)から成り立つ。

(5)「短所」を克服しても、高々人並みにしかなれない「長所」を「発展」させてこそ、行き詰まっている人類の歴史に貢献できる

14

11. ポスト工業社会では生活機能が 生産機能の「磁場」となる

- (1)環境と文化による「サステイナブルシティ」
 - ・ストラスブールにおける知識産業
 - ・大学と企業が連携した技術革新の場
- (2)生活空間の質的充実
 - ・人間の創造活動の「場」としての生活空間
 - ・人間と人間が愛し合い、人間と人間が学び合う「場」
 - ・生活様式としての文化の形成
- (3)人間の触れ合う地域社会
 - 「蓄える」ことから与えることに
 - 交流の「場」と出会いの「場」
 - 道も人間の出会いの場
 - 子供たちの遊べる道
 - 都市そのものが公園や美術館や博物館になる。

15

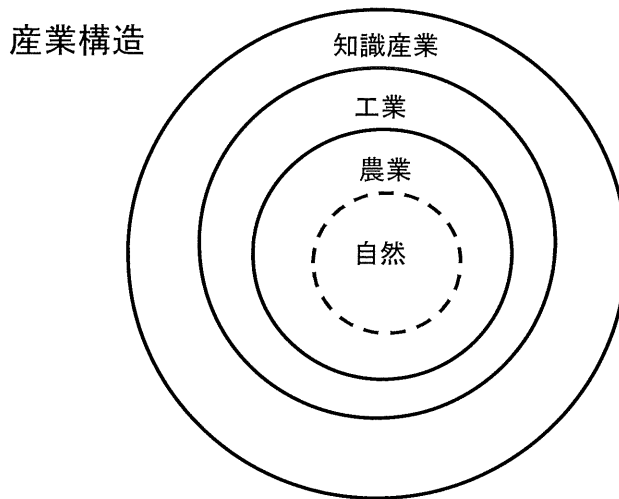
12. 「危機の時代」を襲うパンデミック

- (1)農業社会から工業社会への転換期を襲った「黒死病」
 - 1347年から1353年までに、「黒死病」によって少なくともヨーロッパの人口の3分の1が死亡。
 - 「封建時代の全般的危機」
- (2)軽工業社会から重化学工業への転換期にはスペイン風邪が襲う
 - 第一次大戦中の1918年から翌年にかけて流行し、死者の数は2500万人と第一次大戦と第二次大戦の死亡者と合計したよりも多い。
- (3)工業社会からポスト工業社会への移行期に、「コロナ危機」に襲われていることを忘れてはならない。
 - 「コロナ危機」の克服は、同時にポスト工業社会の形成と結びついている必要がある。

16

13. ポスト工業社会と農業

(1)人間と自然との物質代謝が繰り返される基礎的領域としての農業

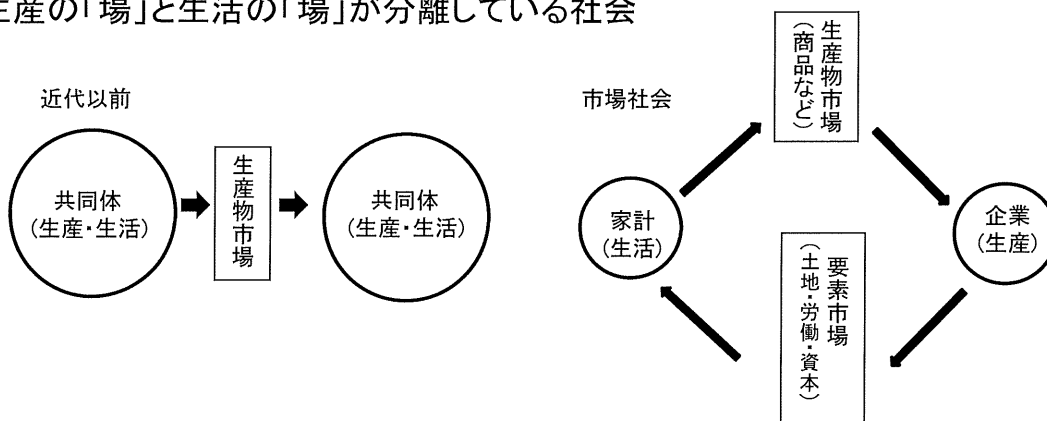


(2)「生きた自然」を原材料とする農業と「死んだ自然」を原材料とする工業の分離
＝要素市場の存在する市場社会

(3)ポスト工業社会では農業を自然との共生という観点から捉え直す必要性が存在する。

14. 市場社会と農業

(1)市場社会＝要素市場が存在する社会
⇒生産の「場」と生活の「場」が分離している社会



(2)市場社会での生産・分配という経済活動は、要素市場の取り引きという市場原理に実行される。

(3)市場社会は工業を前提にしている。
人間の生命を維持するために、生命のリズムにもとづいて生産・分配を実行せざるをえない農業は、要素市場の取り引きで実現できるか。

(4)「市場の失敗」だとすれば、財政による介入が必要となる。介入が有効に機能するためには条件整備が必要となる。

15. 「量」の経済から「質」の経済へ

(1) 自然資源多消費型の大量消費の限界

(2) 熱力学の第一法則と第二法則

【第一法則】

エネルギーの量は一定である。生産も消費もすることはできない

【第二法則】

エネルギーは条件により、仕事の能力や質(エクセルギー)に差異がある

「家の中を電気で暖めようとするのは、電動ノコギリでバターを切るのと同じくらい愚かなことだ」

エイモリー・ロヴィンス(Amory Lovins)

(3) 「量」から「質」へ置き換えるのは人間の知識

(4) 地域社会ごとに相違する自然景観に合致するように、人間と自然との物資代謝を最適にする。

(5) 生活様式＝文化の充実
水と緑の稲作文化一苗族

19

【参考資料】

◆後藤千絵元NHK解説委員からの便り(2022.2.23)

一緒に移住した87歳で認知症、要介護1の実母も東京では活躍の場はあまりなかったのですが、こちらでは連日、薪拾い、赤ちゃんの子守り、野菜の栽培、スタッフの食事の準備など家族以外の人とのつながりが生まれ、出番も増え、イキイキとしています。今年1月から週に3回、デイサービスにも通うようになりました。

デイサービスといっても古民家で親戚のおうちといった感じのところで家事の手伝い、料理の準備など役割を担わせてもらっているようです。

品川のデイサービスは、一度体験しただけで絶対にいけないと言い張っていたのですが今は楽しくて仕方がない様子で毎回、違う洋服を自分で選んでバッチリ濃い目のお化粧もしていそいそと出かけていきます。

スタッフの方も親戚のおばあちゃんと触れ合っているような感じでお世話する人とされる人という関係を作らない工夫をしてくださっているようです。

母は移住した9月から、体調を壊したことが一度もなく、新たなつながりや出番が薬よりも大きな力を与えてくれるということを実感しています。移住してよかったと思えるようになった要因の一つです。

20